

忘れられない 味のある駅名  
～東京周辺篇～

鉄道の旅をすると、様々な駅に出会うことができる。駅舎の外見上の印象もさることながら、駅名そのものが何とも言えぬ響きを持っていて忘れることができないことがある。

単純に風変わりな駅名である場合は記憶に残りやすいのは当然だが、「この名前は何か興味深い由来がありそうだな」と直感的に感じるものはさらに深く記憶に刻まれることになる。そして、旅から帰った後で調べてみたら、思いがけぬ事実が判明したりするので、この楽しみは終わることはない。

これまでの旅で印象に残った駅名を思い出しながら書き記して見ることにした。しかし全国を対象にすると大変な数になってしまうので、東京周辺に絞って・・・。

<1> 日向和田 (ひなたわだ) 地図＝ [https://yahoo.jp/\\_4YoM1](https://yahoo.jp/_4YoM1)

昭和 36 年 4 月、我が初めての登山は奥多摩の御嶽山から大岳山・馬頭刈尾根を経て武蔵五日市へ下るとい行程だった。立川から乗った青梅線の電車は、三段窓のチョコレート色の車両で、発車時の機械音はいかにも一生懸命走ろうとしている音だった。

青梅線には、珍しいしかも耳に残りやすい名前の駅が多く、車窓の景色にも興味津々の路線だった。

いくつかある変わった名前の駅の中のひとつが「日向和田 (ひなたわだ)」。

宮の平 (みやのひら) 駅を出ると、多摩川の屈曲をかわすように掘られたトンネルに入る。トンネルを抜け出たところが日向和田駅になる。

このあたりは、昔は和田村と言ったらしい。南に面して日当たりが良い場所に「日向和田」と地名が付き、逆に多摩川の対岸の日当たりが悪い場所に「日影和田」という地名が付いたとのこと。

日向和田と言う地名は「青梅市日向和田」となって今でも残っているが、日影和田という地名はもう残っていないようである。

(下図参照：国土地理院地形図 左＝現在の地形図 右＝昭和 30 年代の地形図)

阿蘇の火口原の南側の南阿蘇村を流れる白川、北岸の日当たりの良さそうな傾斜地に「河陽 (かよう)」、南岸の日当たりの悪そうな場所に「河陰 (かいん)」という地名があるが、これも日向和田と同類項かもしれない。地名を聞いただけで、その土地の地形や環境が想像できる駅名 (地名) のひとつである。



## <2> 原当麻 (はらたいま)

地図＝ <https://yahoo.jp/B1AJeF>

横浜線の橋本駅から、相模川に沿って南北に走り東海道線の茅ヶ崎駅に向かう相模線。この線は首都圏では比較的遅くまで非電化区間で、ディーゼルカーを見ることができた。

わくわくしながら乗り込んで発車時の轟音を楽しんでいる内に「原当麻」という駅標が目に入ってきた。駅名の響きに魅せられて途中下車して散策をしたことを思い出した。もう 50 年も前のこと。

相撲好き人間としては「野見宿禰 (のみのすくね) と相撲を取った当麻蹶速 (たいまのけはや)」と関係があるのだろうか、と心躍らせたのだが・・・。

駅の西側に「時宗当麻山無量光寺」という寺がある。寺の西側の相模川の東岸には旧石器時代の遺跡がいくつかあり、歴史を感じる土地であることは確かなようである。

また、平安時代にはこの地に当麻城という城があったようだし、鎌倉時代にこの地を治めていたのは源範頼の家臣当麻太郎だったという史実もあるようなので、当麻という地名はかなり古くから存在していたと思われる。さらに、北海道の石北本線に「当麻 (とうま)」という駅があり、アイヌ語起源説も存在する。ちなみにアイヌ語では「湖や沼がある」ことを意味する言葉らしい。

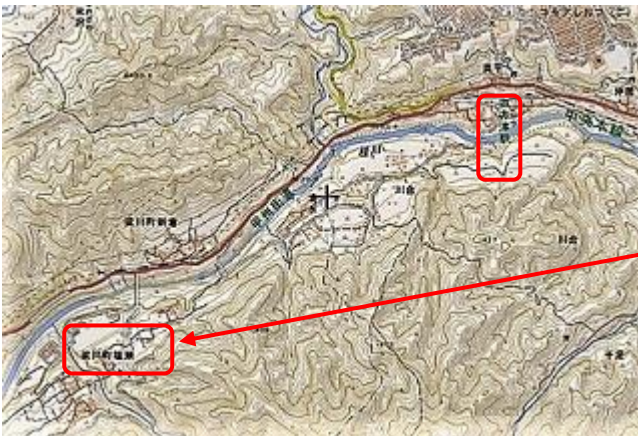
相撲の起源とは無関係な土地らしいことが判明した反面、もっと大きな歴史の流れの中にあつた土地らしいことがわかった。

## <3> 四方津 (しおつ)

地図＝ <https://yahoo.jp/f9n5fP>

中央本線が小仏トンネルを抜けると相模川水系の山が連なるようになり、相模湖を過ぎると川の名前は桂川という美しい響きが変わる。遡っていくと、上野原駅を過ぎると徐々に川幅が狭くなって蛇行を繰り返すようになる。その始まりになるのが四方津駅。U字に切り込まれた谷が走り、北岸には上野原を初めとする大小の河岸段丘が見られるが、南岸には道志山塊の山裾が岸まで迫っている。

「しおつ」と読ませる美しさにひかれてこの駅が好きになったのだが、地名としての由来を考えると合点のいかぬ地名である。「津」は水辺の岸の地名で、主に水運の船着き場のような所に多く見られるのだが、「四方を津に囲まれる地形」というのは存在しない。地元に残されているいくつかの情報を探ってみたが、「四方津の地名の由来は、いくつかあって定説がない」のが実情らしい。



長年にわたって疑問が解けぬままになっていたが、ある日地図を眺めている内に、四方津駅から桂川の南岸を西へ 2Km 余の所に「大月市梁川町塩瀬 (しおぜ)」という集落があることに気がついた。もしかすると、「四方津」の地名の起源は「塩津」ではないだろうか。塩瀬があり塩津があるとすると、「山塩の水運」という筋書きも浮かび上がってくる。こんなことを考える時間を与えてくれる「夢のある駅名」のひとつと言える。

## <4> 谷峨 (やが)

地図＝ <https://yahoo.jp/QRcAS1>

東海道線が開通した頃には、まだ丹那トンネルは開通していなかった。箱根の山を迂回するために、国府津から酒匂川に沿って北上し、左に大きく回って御殿場を経由して沼津に出た。現在の御殿場線がその名残である。鉄道唱歌の歌詞が往時の風景を物語っている。

国府津に降るれば馬車ありて 酒匂小田原遠からず  
箱根八里の山道も あれ見よ雲の間より  
出でてはくぐるトンネルの 前後は山北小山駅  
今も忘れぬ鉄橋の 下行く水のおもしろさ

御殿場線が箱根・足柄の山群の最北端に達するところに「山北」という駅と「谷峨」いう駅がある。

大きな山の固まりの北側に位置する「山北」はわかりやすい地名だが、「谷峨」は文字が示すイメージとしては「峨々たる谷」「谷に立つ峨々たる岩山」など想像を膨らませてくれる。「峨」という文字には南宋の水墨画が持つ雰囲気を感じられるせいもあるかもしれない。

西丹沢の山に入り始めた頃に地図上でその存在を知った。実際に西丹沢の山に入るときには、殆どの場合小田急線の新松田駅からバスに乗るため、不便な御殿場線を利用する人は極めて稀だった。酒匂川に沿って走るバスの窓から見る蒸気機関車に引かれる御殿場線は風情があった。山歩きの帰りに一度だけ御殿場線を使った記憶がある。蒸気機関車の音と煙の中を走るデッキから見た酒匂川の景色は未だに記憶に残っている。

### <5> 指扇（さしおうぎ）

地図＝ <https://yahoo.jp/79mftR>

川越線は大宮駅から西へ走り、川越を経て八高線の高麗川駅に繋がる路線である。大宮駅を出て程なくして「指扇」という美しくも意味ありげな駅名に遭遇する。

地名の由来には諸説あるようだが、「砂州+沖（さすおき）」という説と「砂州が扇形をしていた」ことから「砂州+扇」が転じて「指扇」となったという説が有力らしいが、あまり迫力を感じない。

次なる説は、この地には大きな木があって人に尋ねられると大木を差し示すことが多かったことから「差し大木」と言われた。

さらにもうひとつの説は、付近の枇杷島という地は海岸の丘のような所で、魚釣りの置き針を止める杭が立っていてこれを「差し置き（さしおき）」と言った。後にこれが転じて、文字があてられて「指扇」となった。

素人の私が読んでみて、残念ながらいずれの説も真実味が迫ってこない。

「扇を指す」という文字から感じられるイメージは「優雅さ」なので、何か奥ゆかしい伝承が背後に控えているに相違ないと勝手に思っていた。この先入観が邪魔をするせいだろうか、地元に残された地名由来の仮説を素直に信じることができなくなってしまったのかもしれない。

### <6> 荒川沖（あらかわおき）

地図＝ [https://yahoo.jp/ohH\\_4L](https://yahoo.jp/ohH_4L)

始めて常磐線に乗った時、この駅名に驚いた。荒川の流れからはほど遠い場所に「荒川」とは？

地図を見ると海に面してはいないし大きな河川があるわけでもないのに「沖」とは？

といくつかの疑問が残った。

荒川沖駅の南東にある隣町である阿見町荒川本郷一帯は、江戸時代以前には乙戸川・牛久沼などの氾濫により水没することが多い場所で、「荒れる川の野→荒川野」と言われていた。この荒川野を沖に見る場所ということから「荒川沖」という地名が付いたらしい。

乙戸川は乙戸沼を水源として、小野川に合した後に霞ヶ浦に注ぐ小さな川だがしばしば氾濫したようだ。荒川沖は水戸街道の小さな宿場町で、水戸街道も宿場機能も水難を避けた場所に存在していたとのこと。

「古代にはこの一帯は海だったことから、その海岸線にできた地名」と勝手に想定していたのだが、意外な結末に少々驚いているのが正直なところである。

以上